救済された理性

――サン・ヴィクトール学派の聖書神学と観想論――

中村秀樹

キリスト教の伝統の中で、その救済の真理を実際に生きようとすることは、一つの根本的な態度へと導く。それは歴史の中ですでに決定的な仕方で成し遂げられたキリストによる救いの核心を歪めることなく理解し、そのように理解したことを自らの行いと言葉において現実化し、それを通して自分と同じように救いを必要とする他者へと伝えることである。キリストによる救いは、すべての人間に対する福音であるからである。キリスト者にはそれ故、まず救済の真理を正しく理解し、さらに理解した救済の真理を的確に他者へ伝えてゆく、という二つの根本課題が与えられているのである。キリストの福音によって突き動かされながらも、この二つの課題を見据え、盲信や狂信、誤りに陥らない批判的反省を伴う信仰を育むことの重要性と必要性は、教父思想においても十分に意識されていた。西方教会において特に重要であるのは、アウグスティヌス（Aurelius Augustinus 四三〇年歿）がキリスト者の養成全般について論じた円熟期の著作『キリスト教の教え De doctrina christiana』である。アウグスティヌスは、上述の二つの根本的課題をこの著作の構造的枠組みに据え、第一巻から第三巻では理解すべき救いの内実を正しく理解する仕方について、第四巻では理解したことを表現する仕方について詳論している(1)。この二つの方法は、救済の真理がそこに

おいて開示されている聖書の読解を一貫して基盤にしており、それが目指すのは、聖書を読解する者が神と隣人に対する二つの愛によってしっかりと立つようになること（一コリ八・一）、すなわち三位一体の愛の交わりに招き入れられることを通して救済に与ることにある。この最終的な目的への視点から、アウグスティヌスは、人間が救済に与るために本来的に関わるべき「もの res」として神、キリスト、教会、そして神と隣人への二つの愛の掟を浮き彫りにする(2)。人間の精神的、文化的な営みがそれ自体どれほど優れたものであっても、それらは人間に由来するかぎり救済をもたらす「もの」ではなく、したがってそれらに対する関わりは救済という最終的目的から規定されなければならない。『キリスト教の教え』におけるキリスト者の養成についての教説は、聖書読解理論を中心に、キリスト者の根本課題である救済の真理の正しい把握とその宣布の在るべき仕方について、これらの課題が遂行される場である世界との関わりも含め、明確に主題化している。そのためアウグスティヌスのこの著作は、世界の中で真にキリストに従って生きるための重要な道標の一つとして、キリスト教的ヨーロッパの精神史に深く影響を及ぼすことになったのである(3)。

アウグスティヌスの精神に従ってキリスト教的生を深めようとした人々は数多いが、その中でも注目すべき共同体の一つにパリのサン・ヴィクトール修道院がある。一一〇八年頃にシャンポーのギョーム（Guillelmus Campellensis 一一二二年歿）によって創立されたこの修道院は、十二世紀ヨーロッパにおけるキリスト教神学の研究と教授の一つの中心であった。神学史上もっとも重要な神学者は、ギョームから修道院学校の指導的役割を引き継いだフーゴー（Hugo de Sancto Victore 一一四一年歿）と、フーゴーの後継者としてその神学思想を独自の観想論において完成したリカルドゥス（Richardus de Sancto Victore 一一七三年歿）の二人である(4)。フーゴーは、アウグスティヌスの聖書読解理論を『ディダスカリコン：読解の学び Didascalicon de studio legendi』(5)において体系的に展開すると共に、『キリスト教信仰の諸秘跡について De sacramentis fidei christianae』(6)によって教義学、特に秘跡論の分野で決定的に重要な業績を残した。そしてリカルドゥスは、『観想への魂の準備―小ベニヤミン― De praeparatione animi ad contemplationem, liber dictus Benjamin minor』(7)、『観想に

ついて―大ベニヤミン―De contemplatione, seu Benjamin maior』[8]、『力強い愛の四つの段階について De IV gradibus violentae caritatis』[9]などの独自性に満ちた著作において、フーゴーの聖書読解理論と教義学の領域における探求を受け継ぎながら、それらを観想論という形で希に見る霊性との緊密な統合へともたらしたのである[10]。

フーゴーの指導下で当時最高の教育体制を備えたこの修道院学校からは他にも多くの優れた神学者が出ている。のちにノルマンディー、アヴランシュ Avranches の司教となったアカルドゥス（Achardus de Sancto Victore 一一七五年歿）は、『神の一性と被造物の複数性について De unitate Dei et pluralitate creaturarum』[11]という著作において独自の美的存在論を構築し[12]、その説教集ではキリスト論と教会論に関する透徹した洞察を示している[13]。聖書神学の領域では、イングランド、ウィグモア Wigmore のアウグスティヌス会修道院長となったアンドレアス（Andreas de Sancto Victore 一一七五年歿）が、ユダヤ人のもとでヘブライ語と旧約聖書の読解を学び、旧約聖書をユダヤ教の文脈に即して字義的に解釈しようとする試みを展開した[14]。また『命題集 Sententiae』という形式で神学的論考を著した先駆者であり、優れた神論と三位一体論を残したムーランのロベルトゥス（Robertus de Milidunо 一一六七年歿）、ロベルトゥスの方法を継承し、その『命題集』が幅広い受容を獲得したペトルス・ロンバルドゥス（Petrus Lombardus 一一六〇年歿）、人文主義的著作家として知られるソールズベリーのヨハネス（Ioannes Sarisberiensis 一一八〇年歿）らもサン・ヴィクトール修道院で学んだ経験を持っている[15]。

これらの多彩な顔ぶれが示すように、サン・ヴィクトール修道院で学んだ後、さらに学問的遍歴を続けたり、またはそこに残って研究教授活動を続けた神学者たちが、皆まったく同じ神学的方向性を共有していたわけではない。だがこの修道院に属していた神学者たちは皆アウグスティヌスに由来する『修道規則 Regula Sancti Augustini』に従って生活していたのであり、そのため彼らはアウグスティヌスの神学の影響のもとに一つの根本的傾向を示している[16]。それはこの修道院学校の最盛期を築いたフーゴーと、その直接の後継者であるリカルドゥスにおいて特に顕著であり、彼らが共有する根本的問題関心を中心に一つの学派について語ることが可能である。その根本的問題関心とは、救

済史の正しい理解に基づき信仰を反省的に捉えること、そのような反省的信仰と神学的思索の基盤として聖書の学び lectio を徹底すること、そして愛における信仰の実存的深まりと実りを重視することである。

このようなサン・ヴィクトール学派の神学思想が単に修道院神学からスコラ神学への過渡期的なものに過ぎないのではなく、むしろアウグスティヌスの精神を生かした神学と霊性の緊密な統合――これがまさに十三世紀以降の大学での神学教育において失われていったのであるが――を示すものとして重要な研究対象であることは、Beryl Smalley と Henri de Lubac による先駆的研究以来[17]、様々な形で指摘されてきた[18]。しかし原典の批判的検討が徐々にしか進まず、また最も重要な神学者であるフーゴーとリカルドゥスの思想が主に教義学と神秘思想という領域を中心に研究されてきたことは、学派の特徴である聖書読解理論を中心にしたその思想の全体的解明を困難なものとしていた。この状況を打破しようと試みたのは、二十世紀に目覚ましい進展を遂げた中世研究の方法論を取り入れながら、サン・ヴィクトール学派専門研究の基礎を築いた Jean Châtillon である。そしてその二人の弟子、フランスの Patrice Sicard とドイツの Rainer Berndt がその遺志を発展的に継承したことで研究は新たな段階に入った。Sicard とその協力者 Dominique Poirel は主にフーゴーの著作を哲学的観点から校訂、研究しており[19]、Berndt は一九九〇年にマイン河畔のフランクフルトにあるイエズス会の哲学神学大学 Philosophisch-Theologische Hochschule Sankt Georgen に Hugo von Sankt Viktor Institut für Quellenkunde des Mittelalters を設立し、サン・ヴィクトール学派の全貌を本来の神学的コンテクストから解明することを目指している[20]。この研究所では、フーゴーとリカルドゥスを中心に重要な神学者の原典の批判校訂版の出版を行いながら、修道院学校での聖書注解、典礼と説教の実践とそれが含む神学思想、人文教育と哲学、教義学、神学的人間論から神秘思想に至る学派の霊的生活と神学的営為の全体を研究対象としている。特に学際的な国際学会を重ねて主催し、その成果として学派の神学の基盤である聖書読解理論とその実践の全貌を解明しつつあることは、研究史上きわめて重要な業績である[21]。本稿ではこの研究成果に基づいて、サン・ヴィクトール学派の神学の根本的特色をフーゴーとリカルドゥスの思想を中心に検討するこ

とにしたい。

一　信仰とその救済史的基盤

フーゴーは教義学における主著『キリスト教信仰の諸秘跡について』第一巻第十部において、「ヘブライ人への手紙」における「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです（ヘブ　一一・一）」という信仰の定義から出発し、その特質を明らかにしている[22]。信仰において問題となっているのは、望むに値する見えない事実としての救済、「人の心に思い浮かびもしなかったこと（一コリ　二・九）」であり、その内実を人間の自然本性に基づく理性的認識能力によって把握し尽くすことはできない。信仰の対象が、信仰を持たない自然理性には十全に把握不可能であるならば、信仰がそこへと向かうものが信じるに値することcredibiliaであり、かつ真であることveraは、厳密にはただ信仰によってのみ捉えられる[23]。つまり認識論的には、信仰の対象は信仰行為にとってのみ明らかなものなのであり[24]、その限りで信仰の対象は信仰によって信仰者の精神の内に存立しているのでなければならない。換言すれば、信仰者の内において信仰の対象が現実に存立していることそれ自体が信仰なのである[25]。それ故、信仰の対象について問うことは、信仰者にとってのその対象の意味を問うことであり、現実に信じられているという事態との関わりなしに信仰の対象が理解されることはできないのである。

この信仰と信仰の対象との根源的関係性、すなわち信仰の本来的対象である神は信仰においてのみ顕わになり、また信仰は神に対してのみ向けられるという関係性は、ただ神からの働きかけによって可能とされる。すなわちキリスト教の信仰は、その起源に関して、人間の自然本性に基づく他の一切の理性的認識から根本的に区別される。キリスト教の信仰は、「聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによって始まる（ロマ　一〇・一七）」のであり、それは肉において語り継がれてゆくキリストの言葉に決定的に依存している[26]。信仰の端緒は、歴史の中に受肉した神の言葉であるキリストであり、ただキリストの世界への到来によってのみ信仰の基盤となる認識は与えられる。それ故、信仰は、その認識論的な構成からして、世界の歴史の中で神による人間の救済がすでに成し遂げられたこと、

すなわち救済史historiaに分かつことのできない仕方で結ばれている。この救済史において顕わになっているのは、創造以前から隠されていた救いの神秘[27]（コロ一・二六）、すなわち御子の御父への関係性に人間が参与する可能性である。この参与は、ただ神との根源的な関係性として与えられる信仰においてのみ可能とされるものであり、いかなる世界内的な被造性によっても獲得されることはできない。神が永遠からそのひとり子に向ける愛と同じ愛によって人間を愛し、その愛の交わりに人間を招き入れることを望んでいることを示すことができるのは、ただ受肉した御子のみである。愛そのものである神が、歴史の中でキリストにおいて自己を明示的に啓示したことに、キリスト教信仰の決定的な新しさは存立している。この信仰の恵みは、すべての人間に対する救いを明瞭に述べ伝え、それが信じるに値するものであることを示しているのであり[28]、その結果、信仰に基づくのではない何らかの仕方で神についての十全な認識、すなわち神の自己啓示についての認識が生じる可能性を端的に排除しているからである。

フーゴーは、自然神学的神論に対し、正当な信仰の基準が、まさに人間理性による神の十全な把握不可能性を妥協なしに認めることにあることを強調する[29]。神は、世界内に見出される一切のものに対して、ただ他としてのみ名指され得る[30]。世界内のすべての現実性は被造的なものであって、それらと創造主との間の差異は、被造物相互の間のいかなる差異よりも大きい[31]。一切の自然本性的理性に基づく神認識は、それが被造性の洞察に支えられているとしても、被造性の根拠の認識に尽きており、それは救済史における神の余すところない自己啓示に基づく神それ自体の在り方の積極的で十全な認識ではない[32]。たしかに被造物が創造主である神に決定的に依存している限り、被造物の根拠としての神に対する何らかの類似性similitudoが語られるとしても、その逆の方向性、すなわち神から被造物への類似性を見出すことはいかなる仕方においてもできない。類比analogiaは双方向的なものではなく、一方向に限られているのである[33]。

自然本性的理性能力に基づく神認識はきわめて不完全なものにとどまるのであり、このような認識によってそれ自体として人間の神との交わりが開かれ、その救いが根拠付けられることはない。それでもこのような不完全な神認識は、それに基づいて本来的な信仰の内実がより深く理解可

能なものとされる限りにおいて、信仰の構成要素となることとなる。というのも神認識としては不完全なものであっても、自然神学的神論においては、神と被造物の間の差異が否定的認識を通してすでに主題化されることが可能だからである（ロマ 一・二〇）。そしてこの神と被造物の間の差異を十分に反省的に捉えることは、本来的な信仰を確かなものとして支える自然本性的な認識基盤となり得る。アウグスティヌスが『キリスト教の教え』第二巻において強く注意を喚起しているように、神と被造物を取り違えること、すなわち偶像崇拝において根源的な罪は存立し、それは信仰者にも自己反省を欠いた場合に起こり得るからである[34]。

だが信仰が、神自身との愛の交わりとして現実に与えられるためには、人間の一切の自然本性的な能力を超えて、神の霊が与えられる必要がある。ただ聖霊が与えられることにおいて、すなわちただ信仰において、神は神自身として経験される[35]。福音の真理性は、神の霊の付与においてのみ真に確証されるのであり、信仰の基礎付けは実存的なものなのである。このような仕方でのみ与えられる信仰は、それ故、そこからさらにその真理性が基礎付けられるようなより高次の次元に秩序付けられることを本質的に拒否する。もし信仰が、何らかの他から論理的に導出されると主張されるなら、まさにそのことにおいて、それはまだ本来的な信仰ではないことが示されている。信仰の同意に先行するような、信仰の積極的な論理的基礎付けは不可能なのであり、信仰の基礎について主題化する唯一の可能性は、救済史において現れたキリストの福音が一切の世界内的な判断を超えていることを示すことの内にのみ存するのである。

二　聖書の構造

さて一切の世界内的な理解を超える救済の真理は、歴史の中で神自身によって示された後、信仰において先行する人々によって証しされ、伝えられてきた。その中心にあるのは聖書 Sacra Scriptura における救済史の記述である。それ故、信仰を反省的に捉え、その理解を正しく深めるためには、信仰の基盤となる救済史がそこに記された聖書という特異なテクスト群をどのように扱い、どのようにそこから正しい信仰理解を得るかについて探求しなければならな

い。フーゴーとリカルドゥスはこの方法論的課題を果たすにあたり、アウグスティヌスの『キリスト教の教え』における聖書読解理論を十分に咀嚼した上で、聖書全体の成り立ちとその読解行為の解釈学的、認識論的分析に関しては、より体系性と徹底性を深めた考察を展開した。

フーゴーはまず、聖書が構造 structura を持っていることを指摘する[36]。そしてこの構造を明らかにするために、愛そのものである神の自己開示が進みゆく在り方を段階的に理解し、それによって時の全体 tempora を神による人間の救済の歴史として捉える。すなわち時は、（1）自然法の時 tempus naturalis legis、（2）書かれた法 t. scripturae legis（律法）の時、（3）恩恵の時 t. gratiae に区分される[37]。世界の創造からモーセの出現までを含む自然法の時においては、神によって創造された自然としての在り方に、人間の神への関係性の規範ないし法はすでに含まれていたが、それは人間に対して主題的に明示されてはいなかった。そのため人間は神の似像として創られた（創一・二七）ものとして、認識と愛という精神的力によって原像である神を本来的に志向することが可能であったにもかかわらず、この神の似像としての在り方を十全に実現することなく、世界内の有限的諸善へと秩序なく向かい、その結果互いに罪を犯しあうこととなった。そこで神は、モーセを通してイスラエル民族に十戒を与え、人間がどのように神に向かい、また神との根源的関係性に基づいて世界と関わるべきかを示した。この規範は律法として書き留められ、それに従って生きようとする人間と神の間に一つの契り testamentum が結ばれたのである。だがこの律法の時においては、規範は明示されたものの、それに従って実際に生きる力が人間に与えられたわけではなかったので、むしろ律法はそれまで罪と分からなかった罪を暴き、結果として罪は増し加わることとなった（ロマ五・一三、二〇）。それ故、神は自ら世界内に受肉し、自らが無制約な愛そのものであり、この愛との関わりに基づいて生き、それによって神の愛それ自体に参与することが人間の救済であることを示したのである。神の愛による人間の救済が歴史の中で決定的な仕方で為されたことによって、それまでの神と人間の間の律法に基づく契りは、根本的に新たな愛の契り novum testamentum として結び直された。この恩恵の時代は、キリストによって始まり、現在を経て、キリスト教的に理解された世界の終末まで続くのである[38]。

創造から終末に至るまでの時の全体が救済史として捉えられることによって、聖書の構造の基盤が明らかになる。ここで問題となっているのは聖書の書物としての構成ではなく、それに基づいて聖書が一つの全体において救いの書Scripturaとして成り立つこととなった根拠と聖書との関係である。ここで聖書成立の根拠とは、神の人間への関わりそれ自体であり、聖書の主題は一貫して神による人間の救済の真理に他ならない。しかるに神による人間の救済は、恩恵の時とそれ以前の時とでは本質的に異なる仕方で遂行された。神は、恩恵の時には愛そのものである自らの在り方を余すところなく人間に啓示し、その救済の真理性を証ししたからである。それ故、この救済の真理は、恩恵の時についての記述である新約聖書においては明示的に主題化されているが、それ以前の時、すなわち旧い契約について扱う旧約聖書においては未だ実現されていないものとして暗示的に予示されているに過ぎない。「[聖書の]双方[の部分]に同一の真理があるが、旧約には密かな真理があり、新約には明瞭な真理がある。旧約には約束された真理があり、新約には証示された真理がある[39]。」このように「聖書」の全体は、救済史がその本質を尽くす恩恵の時から考察されることによって、はじめて「構造」として捉えられることが可能になる。ユダヤ教の聖典であった文書群は、新しい契約の完全性という観点、つまり神による人間の救済はキリストにおいて為し遂げられたという理解に基づいて、その意味を失った旧い契約についての記述と見なされる。ユダヤ教が認めることのないこの評価に基づいて、それらの文書群は「旧約聖書」としてキリスト教的な「聖書」の一部分を構成することになるのである。そしてキリスト教的聖書読解においては、救済の真理を正確に捉え、伝えてゆくことが目指される以上、聖書の全体は救済の真理が余すところなく示されている新約聖書を起点に理解されなければならない。「この[キリスト教的な聖書]読解においては、そこにおいて明瞭な真理が宣べ伝えられている新約は、そこにおいて同一の真理が象徴によって暗示的に描かれ、密かに告げ知らされている旧約に優先する[40]。」

この聖書の構造理解に基づき、フーゴーは読解行為の目的でありかつその規範である救済の真理という観点から、聖書の読み方を二つに区分する。第一の読解法は、キリスト教信仰の観点から聖書全体が提示している救済の真理の

意味を問う霊的読解であり、それにより得られる認識の内実は霊的理解 spiritualis intelligentia と呼ばれる[41]。第二の読解法は、救済の歴史的生起を時間的継起に即してそれ自体として捉えようとするものであり、フーゴーはこれを歴史の読解 lectio historiae と呼ぶ[42]。この読解法区分は、キリスト教的聖書読解が究極的な救済の真理を探求するものである以上、その中心を霊的理解を求める第一の読解法に置いている。たしかに救済の真理の意味を問うためにも、救済の歴史的生起の在り方それ自体を知らねばならず、そのためには聖書を旧約の部分からはじめて時間的継起にしたがって読まなければならない。その限りにおいて、キリスト教的な救済の真理の探究としての「聖なる教え sacra doctrina の基礎と始源は歴史である[43]。」だが救済の歴史的生起自体の意味を洞察するためには、新約聖書において明示された救済の真理から出発しなければならない。聖書の全体は、恩恵の時における救済の成就を基点として読まれることによって、救済の歴史 historia として自己を開示する。歴史の読解は、霊的読解との関係性に置かれることによって、はじめてそのようなものとして構成されるのである。

三　聖書読解の解釈学

サン・ヴィクトール学派の聖書読解理論の特徴は、上述のような聖書の構造理解に基づいて、読解行為とその対象である聖書テクストの関係性を解釈学的、認識論的に徹底して分析してゆくことにあるが、特にリカルドゥスはこの点に関して、アウグスティヌス受容に基づくフーゴーの貢献をいっそう理論的に深めている。リカルドゥスは、聖書の記述様式を、人間によって書かれる他の書物との比較において次のように特徴付ける。「[神的な書物は、神的な] 見えざるものを見えるものの姿で描いており、そうしてこれら [神的な見えざるもの] の記憶を、望ましい形象のある種の美しさによって、私たちの精神に刻印するのである[44]。」この独自の記述様式は、人間精神の弱さのために神によって配慮されたものである。人間精神は普遍性への開きを持ちながらも、その身体性の故に、認識対象を感覚的知覚に基づく表象像によって捉えようとする傾向性を本性的に有しているからである。人間精神が認識することに慣れ親しんでいるのは、質量的な事物、す

なわち感覚的知覚によって把握可能なもの、可感的なものsensibilia、リカルドゥスが見るという働きにおいて精神的存在者としての人間の感覚的知覚の在り方を集約的に捉えつつ「見えるもの visibilia」と呼ぶものである[45]。このため神は、聖書記者たちに聖書を霊感によって記述させた際、「質量的な手引 materialis manuductio」を用いて、人間精神の弱い認識能力を助けた[46]。それ故「神的な書物は、世俗的学知よりも次の点で遙かに優れている。すなわち神的な書物は、言葉だけではなく、意味表示を行う《もの》res significativae を含んでいるのである[47]。」この「意味表示を行う《もの》」は、世界内的な存在者、つまり感覚的知覚によって捉えられ得る「見えるもの」である。それらは聖書の記述において、まず言葉 voces によって言語的に表現化され、意味を持つ。だがそのように言葉によって表現化され、意味表示された《もの》res significata は、さらなる転義的理解に対して開かれており、それによって「見えざるもの」を意味表示することができる。つまり「意味表示を行う《もの》」は、《第一のもの》として、《第二のもの》を指し示す《もの》res primae, res secundas significantes なのである[48]。

それ故、聖書の読解においては、意味把握の二つの段階が問題となっている。言葉と、言葉によって意味表示された《第一のもの》との間には、テキストにおける根源的意味、すなわち文字に即した意味 sensus secundum litteram、字義的意味が生じる。この字義的意味は、救済史の生起の在り方それ自体を意味表示する限りにおいて歴史的意味 sensus historicus とも呼ばれ、その獲得を上述の第二の読解法としての歴史の読解が目指すものである[49]。《第一のもの》と、救済の業における神の見えざるものとしての《第二のもの》との間には、字義的意味に対するより深い意味、すなわち霊的意味が生じる。リカルドゥスは、この霊的意味を、はじめは隠されているが読解によって露わになるべきものとして神秘的意味 sensus mysticus と呼ぶ[50]。この霊的意味ないし神秘的意味の獲得を目指すのが、上述の第一の読解法、すなわちキリスト教信仰の観点からの霊的読解である。

このような霊的意味の把握、すなわち霊的読解存立の可能性を、サン・ヴィクトール学派は教父思想の伝統に従い多層的に捉えている[51]。字義的意味に加えて為されるより深い意味把握が、神によって為された救済の神秘、つ

まりキリスト教信仰の教義内容についてのものである場合には、その読解はアレゴリア allegoria と呼ばれる[52]。またアレゴリアによって把握されたより深い意味が、読解者自身の実存的完成のために適用される場合にはトロポロギア tropologia と呼ばれる。ここでは読解者の神との関係における本来的な倫理性が問題となっているため、リカルドゥスはトロポロギアによる意味把握を「倫理的知 scientia moralis」とも呼ぶ[53]。さらに霊的読解によって目指される霊的理解が人間の終末における最終的完成についてのものである場合には、その読解はアナゴギア anagogia と呼ばれるのである[54]。

これらの多層的に理解された霊的読解の可能性は、相互に独立のものと考えられているわけではない。それらはアレゴリアを出発点として、アレゴリアに基づく一つの全体性の内に位置付けられることを通して、霊的理解として構成される。トロポロギアは、自然本性的能力としての理性によって獲得可能な倫理的洞察ではなく、キリスト教信仰の観点から人間の実存的完成を目指す認識であり、またアナゴギアが捉えようとする人間の最終的完成はキリスト教的終末論におけるものである。霊的読解の中心にはアレゴリアがあるのである。だがキリスト教的観点からは、霊的読解自体が字義的読解に対しても中心的位置を占めるのであるから、アレゴリアは霊的読解の多層性の内に留まらず、聖書読解行為全体の中で中心的位置付けを得ることになる。たしかに救済史の生起の在り方自体がそれを経なければ理解されない限り、字義的読解はそこから読解者が出発しなければならない第一の基盤である。だが字義的読解において見出されることが全て、霊的読解の中心であるアレゴリアに適合し、より深い信仰理解の基盤になり得るわけではない[55]。これは特に、旧約聖書の字義的読解に妥当する。キリスト教的観点から見るならば、「聖書は、字義的に互いに対立するように見える箇所、また場合によっては不合理で不可能なことを述べているように見える箇所を多く含む[56]」からである。このような箇所の字義的読解の適合性を聖書読解行為の全体性において測る規範は、キリスト教信仰それ自体、特にその根底にある信仰の原理 principia fidei としての信仰箇条に他ならない。もし読解者が、信仰の原理に合致しない字義的読解の内容に無理に合わせようとしながら霊的読解を行うならば、彼はキリスト教的には意味のない恣意的な解釈に陥ってしまうことになる。そ

れ故、聖書読解における真理についての判断は、キリスト教的にはただ《文字》のみに、すなわち字義的読解のみに依存することはできない。むしろ読解者は、フーゴーがアウグスティヌスの『創世記逐語註解』からの長い引用によって強調するように、健全な信仰 fides sana によって全てを判断しなければならず、そのため神の霊によってすでに陶冶され、信仰の原理によって自らの信仰においてしっかりと形作られていなければならない[57]。「ひたすら文字にのみ従う人は、長く誤りなしに進むことはできない……文字の人ではなく、〈霊の人が全てを判断するのである（一コリ二・一五）〉[58]。」聖書読解行為全体の中心は、霊的読解としてのアレゴリアにあるのである。

このように信仰の原理に基礎付けられたアレゴリアは、多様性は容れるが、その内に矛盾対立を許すことはない[59]。アレゴリアは、信仰理解に関わる主題全てを矛盾なく含む唯一の総体的な霊的理解として構築される。聖書本文に直接に字義的に見出されないことについて信仰上の洞察が為される場合には、それはアレゴリアにおいて獲得されるのであり、信仰理解の展開としてのキリスト教教義理解は、神の霊の導きにおいてアレゴリアとして深められ、展開される霊的理解に他ならない。それ故、アレゴリアを中心に霊的読解において聖霊によって育まれる中で、聖書の読解者は、救済史の出来事の一切に対して神が与えた《意味そのもの》に触れ始める。この「神的な意味 sententia divina」は、救済の神秘それ自体であって、「いかなる矛盾も許さず、常に適切であり、常に真である[60]。」ここで捉えられる神的な意味は、神が救済史を実現する中で示してきた自らの救済意志としての愛の内実であり、歴史における神意に他ならない。たしかに人間によって、この神意が捉え尽くされることはあり得ない。しかし神の霊に導かれて為される霊的読解は、すでに神意そのものへの洞察として、その一なる総体性への参与の始まりである。この神意としての神の愛への参与に、サン・ヴィクトール学派における神学、すなわち神の学びの核心はあるのである。

四　愛の観想

リカルドゥスはそれ故、アレゴリアに中心を持つ聖書の学びを、人間が神に与えられた愛に基づいて、その生の全体を救済への現実的参与として方向づけてゆくための重要

な過程として捉え、それを脱自的愛の実践に頂点を持つ観想論の内に位置付ける。神へと真に向かい、その愛に参与しようとする人間は、聖書の学びにおいてキリストによる救済を正しく捉え、霊的読解を多層的に深めてゆかなければならない。だがリカルドゥスによれば、聖書の霊的読解のためにはその要件が整っていなければならない。それは読解者が、与えられた神の霊の招きに応え、神をすでに決定的に自らの愛の対象としていることである。聖書の霊的読解を可能にするのは、人間の情動の全体が根源的に神へと秩序付けられ、愛の徳として形成されることである(61)。この愛の徳は、神を求める人間に対して神から与えられる(62)。人間は、その愛の秩序が向かうべきところへ向けて神によって回復されてはじめて、聖書を媒介に真の神認識へ招かれ、神が誰であるかを知ることが可能となる。この招きの中で人間は、与えられた愛によって愛した者へと完全に惹き付けられ、愛した者を余すところなく知ることへと内的に駆り立てられる。「愛のあるところには眼がある。私たちは、大きな情熱をもって、愛する相手をすすんで見つめるからである(63)。」

リカルドゥスは、愛によって構成され、愛の対象である神へ導かれる人間の霊的上昇の動きを「黙想 meditatio」と呼ぶ(64)。黙想は霊的上昇ではあるが、未だ推論的で漸進的な認識によって特徴付けられ、そこでは愛と認識が相互に補完し合いながら働く。一方では霊的読解を精神の上昇として構成した愛は、愛された者がより深く知られるにつれいっそう強まってゆき、他方ではそのように強められる愛は、愛された者をさらに深く認識することへと認識者をいっそう駆り立てるのである。この愛と認識の補完性の内に完成してゆく黙想は、人間が自らの原像である神との関係性の内に、似像である自己の在り方を見抜いてゆく自己認識の過程でもある。この自らの根拠との関係性の中で自己が十分に見通された時に、黙想は次第に人間的精神の最高次の遂行様式である「観想 contemplatio」へ移行し、本来的に神を知る恵みが与えられることになる(65)。観想において人間は、自らが神への愛によって構成され、導かれていることを深く自覚しながら、その愛の内に一切を――神と自己と他の全ての被造物を――認識する。この段階においては、観想を構成した愛は、観想者の全存在を根底から規定するものとなっている。それ故、観想者は、観想の頂点において、愛によって神へと自己から奪い去られ、脱

自extasisの内に神と一致することになる[66]。観想は精神の総体的な遂行であるが、精神の二つの根源的力の内の一方である認識は愛の対象に及ばないので、もう一方の力である愛が認識による停滞を耐えることができなくなり、愛する者へ向かって溢れ出てゆくのである。認識が行くことのできないところへ、愛は向かい、愛する者と一致する。この愛における一致unioにおいて、観想者は愛した者が誰であるかを観るのである[67]。

観想者は、恵みとして与えられるこの一致によって、自らの全存在が、一致した愛する者とできる限り同じ在り方となることを望むようになる。すなわち観想者は、救済史の中で自らが与え尽くす愛そのものであることを示した三位一体の神の愛のあり方に、できる限り従おうとするのである。だが、それは観想者自らの世界内的存在様式をもって為されなければならないので、その範となるのは世界内に受肉し、十字架上で神の愛を余すところなく示した第二の位格の姿、すなわちキリストのへりくだりの姿forma humilitatis Christiに他ならない[68]。このキリストの愛の姿に可能な限り参与することにおいて、愛そのものである神の似像としての人間が、その世界内的な生の遂行において獲得し得る完全性は存立する。この完全性は、聖書の霊的読解において特徴的であった霊的上昇の内にはもはやない。それは「自分を無にした（フィリ二・六）」キリストに従い、その救いを自己の全存在をもって他者へ伝えてゆく道として、むしろ下降と霊的へりくだりにおける愛の実践の内に存立するのである[69]。

＊　＊　＊

リカルドゥスは、フーゴーがアウグスティヌスの神学の受容に基づいて展開したキリスト教的聖書読解理論を、さらに認識論的に体系化することによって、それを観想論を枠組みとする人間論の内に位置付けている。このリカルドゥスの神学的人間論は、人間が本来持っている愛という力を、霊的な聖書の学びと観想によって現実化することを通して、神の似像としての人間存在の全体性において完成するための指針を示すものである。リカルドゥスの著作がすでに十二世紀末から当時としても異例の勢いで筆写され、読まれていたことは、真にキリストに従って生きようとした人々がリカルドゥスの思想にその助けとなる洞察を見出

していたことを証ししている[70]。それはリカルドゥスが、自らの神学を一貫して神の愛による人間の救済と完成（一コリ八・一）という本来的なキリスト教的関心に基づいて構築しているからに他ならない。フーゴーによってその枠組みを与えられ、リカルドゥスによって深められたサン・ヴィクトール学派の神学は、救済史的基盤の徹底した考察に基づく反省的な信仰理解と精緻な聖書読解理論を展開すると共に、観想論においては愛による人間存在の統合的完成のための道を提示している。この神学は、神の愛に参与することによって救済された理性の営みであり、ここに示された霊性と神学の緊密な統合は、アウグスティヌスの精神の中世における一つの具現化である。それはキリストによる救済の真理を正しく理解し、それを現実に生きることを通して他者へ伝えてゆくというキリスト者の根本課題に対して道標となろうとする総合的神学であり、神学理論と現実の生との乖離が問題となる今日の状況にとっても重要な示唆を含んでいるのである。

注

（1）Cf. Aurelius Augustinus *De doctrina christiana*, ed. Iosephus Martin (CChr. SL 32), Turnhout 1962: I, 1, 1. この著作の構造分析を含むきわめて重要な基礎研究として Hermann-Josef Sieben: Die « res » der Bibel. Eine Analyse von *De doctrina christiana* I-III, in: *Revue d'Etudes Augustiniennes et Patristiques*, XXI, 1-2, Paris 1975, pp. 72-90 を参照。

（2）Cf. Sieben: op. cit., pp. 74-80. 『キリスト教の教え』における res の内実についての優れた邦語論文として、田内千里「アウグスティヌス『キリスト教の教え』第一巻における res について」『日本カトリック神学会誌』第二一号、二〇一〇年、五五―七三頁を参照。

（3）『キリスト教の教え』の中世における影響史については Edward D. English (ed.): Reading and wisdom. The *De doctrina Christiana of Augustine* in the Middle Ages, Notre Dame 1995 を参照。また影響史も含む新たな包括的研究として Karla Pollmann: Doctrina christiana. Untersuchungen zu den Anfängen der christlichen Hermeneutik unter besonderer Berücksichtigung von Augustinus, *De doctrina christiana*, Freiburg, Schweiz 1996 を参照。

(4) 学派としての全体像については Jean Châtillon: » *L'école de Saint-Victor. Guillaume, Hugues, Richard et les autres* «, *in Communio: Revue catholique internationale 6* (Paris 1981) 63-76 ; id.: » *De Guillaume de Champeaux à Thomas Gallus: chronique d'histoire littéraire et doctrinale de l'École Saint-Victor* «, in *Revue du Moyen Âge latin 8* (1952) 139-162, 247-272; Patrice Sicard: *Hugues de Saint-Victor et son École*, Turnhout 1991; Rainer Berndt: » *Schule von Sankt Viktor* «, in *Theologische Realenzyklopädie 30*, Berlin / New York 1998, 42-46 を参照。

(5) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon de studio legendi*, A Critical Text, ed. Charles Henry Buttimer (Studies in Medieval and Renaissance Latin 10), Washington D.C. 1939. 以下 *Didascalicon* と表記。

(6) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis christianae fidei* (PL 176), Paris 1854, 173-618. 以下 *De sacramentis* と表記。

(7) Richard de Saint-Victor *Les douze patriarches ou Beniamin minor*. Texte critique et traduction par Jean Châtillon et Monique Duchet-Suchaux. Introduction, notes et index par Jean Longère (Sources Chrétiennes 419), Paris 1997. 以下 *Benjamin minor* と表記。この著作の詳細な構造分析として拙論 Hideki Nakamura: *Schriftauslegung und Theologie bei Richard von Sankt Viktor*, in: Rainer Berndt (hg.): *Bibel und Exegese in der Abtei Saint-Victor zu Paris. Form und Funktion eines Grundtextes im europäischen Rahmen* (Corpus Victorinum, Instrumenta 3), Münster 2009, pp. 363-389. を参照。

(8) Richardus de Sancto Victore *Benjamin maior*, ed. Marc-Aeilko Aris: *Contemplatio. Philosophische Studien zum Traktat Benjamin Maior des Richard von St. Victor*. Mit einer verbesserten Edition des Textes (Fuldaer Studien 6), Frankfurt am Main 1996, pp. [1]-[148]. 以下 *Benjamin maior* と表記。

(9) Richard de Saint-Victor: *Les quatre degrés de la violente charité*, Texte critique avec introduction, traduction et notes publié par Gervais Dumeige (Textes Philosophiques du Moyen Age 3), Paris 1955, pp. 127-177. 以下 *De IV gradibus* と表記。

(10) 人間論を中心的視点としてリカルドゥスの思想を包括的に扱う研究として Hideki Nakamura: *Amor invisibilium. Die Liebe im Denken Richards von Sankt Viktor († 1173)* (Corpus Victorinum, Instrumenta 6), Münster 2011 (ca. 580 Seiten) が出版準備中である。

(11) Achardus de Sancto Victore *De unitate <dei> et pluralitate creaturarum: Achard de Saint-Victor. L'unité de dieu et la pluralité des créatures*: texte latin inédit du manuscrit de

Padoue (Antoniana, Scaff. V, 89). Etabli, trad. et présenté par Emmanuel Martineau (Ed. du Franc-Dire, Authentica), Saint-Lambert des Bois 1987.

(12) アカルドゥスの美的存在論については以下の拙訳・註解を参照 Hideki Nakamura: *Achard von St. Viktor. Über die Einheit Gottes und die Vielheit der Geschöpfe*. Übersetzt und kommentiert von Hideki Nakamura, in: Alexander Fidora, Andreas Niederberger (hgg.), *Vom Einen zum Vielen. Der neue Aufbruch der Metaphysik im 12. Jahrhundert. Eine Auswahl zeitgenössischer Texte des Neuplatonismus* (Klostermann Texte Philosophie), Frankfurt am Main 2002, 34-49 (Übersetzung); 120-127 (Kommentar).

(13) アカルドゥスの教会論については拙論 Hideki Nakamura: » *Talem vitam agamus, ut Dei lapides esse possimus*. Kirchweihpredigten Richards von St. Viktor «, in: Claudia Sticher, Ralf Stammberger (hgg.), *„Das Haus Gottes, das seid ihr selbst." Mittelalterliches und barockes Kirchenverständnis im Spiegel der Kirchweihe* (Erudiri sapientia 6), Berlin 2006, S. 293-327。キリスト論については Jean Châtillon: *Théologie, spiritualité et métaphysique dans l'œuvre oratoire d'Achard de Saint-Victor. Études d'histoire doctrinale précédées d'un essai sur la vie et l'œuvre d'Achard* (Étude de Philosophie Médiévale 58), Paris 1969 を参照。

(14) アンドレアスに関しては先行研究を決定的に乗り越えたものとして以下を参照 Rainer Berndt: *André de Saint-Victor († 1175). Exégète et théologien* (Bibliotheca Victorina 2), Turnhout 1991.

(15) 拙訳・ムーランのロベルトゥス『命題集』(中村秀樹訳註)、上智大学中世思想研究所・古田暁編訳・監修『中世思想原典集成』第七巻、平凡社、一九九六年、七四三―八一〇頁を参照。ペトルス・ロンバルドゥスの全体像については Marcia L. Colish: *Peter Lombard*, Leiden/New York 1994, 2 vols、ソールズベリーのヨハネスについては豊かな文献情報を含む Michael Wilks (ed.): The world of John of Salisbury, Oxford 1984 を参照。

(16) Cf. Luc Verheijen: *La Régle de saint Augustin, I, Traduction manuscrite; II, Recherches historique*, Paris 1967. この修道規則の中世における複雑な受容とその意義についての包括的な研究として Gert Melville, Anne Müller (hgg.): *Regula Sancti Augustini. Normative Grundlage differenter Verbände im Mittelalter. Tagung der Akademie der Augustiner-Chorherren von Windesheim und des Sonderforschungsbereichs 537, Projekt C „Institutionelle Strukturen religiöser Orden im Mittelalter" vom 14. bis zum 16. Dezember 2000 in Dresden*; Publikationen der Akademie der Augustiner-Chorherren von Windesheim 3; Paring

2002を参照。

(17) Beryl Smalley: » *Andrew of St. Victor, Abbot of Wigmore: A Twelfth Century Hebraist* «, in *Recherches de théologie ancienne et médiévale 10* (1938) 358-373; id.: » *The School of Andrew of St. Victor* «, in *Recherches de théologie ancienne et médiévale 11* (1939) 145-167; id.: *The Study of the Bible in the Middle Ages*, Oxford 1952; Henri de Lubac: *Exégèse médiévale. Les quatre sens de l'Ecriture* (Théologie: Études Publiées sous la direction de la faculté de théologie S.J. de Lyon-Fourviére 42), I-IV, Paris 1954-1964.

(18) サン・ヴィクトール学派の救済史理解が十二世紀以降の神学に与えた影響についての重要な研究として Rainer Berndt: »Vernunft des Heils. Die Rationalität der Geschichte in theologischen Summen des 12. und 13. Jahrhunderts«, in Rainer Berndt (hg.), *Vernünftig* (Religion in der Moderne 12), Würzburg 2003, pp. 231-262 を参照。

(19) Dominique Poirel: *Livre de la nature et débat trinitaire au XIIe siècle. Le De tribus diebus de Hugues de Saint-Victor* (Bibliotheca Victorina 14), Turnhout 2002 におけるアプローチを参照。

(20) Cf. http://www.sankt-georgen.de/hugo/

(21) 上掲論文集 Rainer Berndt (hg.) : *Bibel und Exegese in der Abtei Saint-Victor zu Paris*. Form und Funktion eines Grundtextes im europäischen Rahmen. (Corpus Victorinum, Instrumenta 3), Münster / Westf. 2009 および所収の拙論 Hideki Nakamura: *Schriftauslegung und Theologie bei Richard von Sankt Viktor*, pp. 363-389 を参照。

(22) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 327C ff.

(23) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 327D: ... quia quae ratione humana non comprehendimus, sola fide nobis credibilia esse et vera persuademus.

(24) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 328D: ... invisibilia Dei ... quae credi solum possunt, ...

(25) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 328C: ... quia bona invisibilia quae per actum nondum praesentia, sunt jam per fidem in cordibus nostris subsistunt; et ipsa fides eorum in nobis subsistentia eorum est.

(26) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 6, 339A: ... , cum fides quae hic foris solo auditu verborum percipitur, ...

(27) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 6, 338D: ... mysterium a saeculis absconditum; ...

(28) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 6, 339C: Sub gratia autem manifeste omnibus jam et praedicatur et creditur, et modus redemptionis et qualitas personae redemptoris.

(29) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 329A:

Ergo Deus credi potest, comprehendi omnino non potest.

(30) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 329A-B: Si terram cogitas, si coelum cogitas, si omnia quae in coelo sunt et in terra cogitas, nihil horum est Deus. Denique si spiritum cogitas, si animam cogitas: non est hoc Deus.

(31) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 329B: Omne enim quod creatum est minus ab invicem distat, quam ille qui fecit ab eo quod fecit.

(32) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 10, 2, 329B: Non potest cogitari Deus quid est, etiam si credi potest quia est, non qualis est comprehendi; cf. Hugo de Sancto Victore *Expositio in Hierarchiam Coelestem S. Dionysii Areopagitae*, PL 175, 976B ff.

(33) この問題についての優れた体系的考察として Peter Knauer: *Der Glaube kommt vom Hören*. Ökumenische Fundamentaltheologie, Freiburg / Basel / Wien 1991 (6. Auflage), p. 29 ff を参照。

(34) Cf. Aurelius Augustinus *De doctrina christiana*, ed. Iosephus Martin (CChr. SL 32), Turnhout 1962: II, 18, 28 ff. ここでのアウグスティヌスの議論についての重要な邦語論文として、田内千里「アウグスティヌス『キリスト教の教え』第二巻における偶像崇拝について」『哲学科紀要』上智大学文学部哲学科、第三六号（二〇一〇年）、一一四頁を参照。一一四頁を参照。

(35) Hugo de Sancto Victore *Expositio in Hierarchiam Coelestem S. Dionysii Areopagitae*, PL 175, 976A-B: Qui autem spiritum Dei in se habent, et Deum habent ...

(36) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon* 6, 4, p. 118: ... nam et ipsa [Scriptura] structuram habet.

(37) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 8, 11, 312D: Unde patet quod ab initio et si non nomine, re tamen Christiani fuerunt. Tria enim sunt tempora per quae praesentis saeculi spatium decurrit. Primum est tempus naturalis legis; secundum tempus scriptae legis; tertium tempus gratiae.

(38) Hugo de Sancto Victore *De sacramentis*, I, 8, 11, 312D: Primum ab Adam usque ad Moysen. Secundum a Moyse usque ad Christum. Tertium a Christo usque ad finem saeculi.

(39) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 6, p. 123: Eadem utrobique veritas, sed ibi occulta, hic manifesta, ibi promissa, hic exhibita.

(40) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 6, p. 123: Unde consequens est, ut Novum Testamentum, in quo manifesta praedicatur veritas, in hac lectione Veteri praeponatur, ubi eadem veritas figuris adumbrata occulte praenuntiatur.

(41) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 4, p. 121: ... quia nimirum oportet divinum lectorum spiritualis intelligentiae veritate esse solidatum, ...

(42) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 4, p. 117: Post lectionem historiae, superest allegoriarum mysteria investigare, ... ; ibidem, VI, 6, p. 123: Non idem ordo librorum in historica et allegorica lectione servandus est.

(43) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 3, p. 116: Fundamentum autem et principium doctrinae sacrae historia est, ...

(44) Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, XVI, p. 130: Res enim inuisibiles per rerum uisibilium formas [diuinae Scripturae] describunt, et earum memoriam per quarumdam concupiscibilium specierum pulchritudinem mentibus nostris imprimunt.

(45) Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, XIV, pp. 126-128: Sed quis nesciat quam sit difficile, immo quam pene impossibile, mentem carnalem, et adhuc in studiis spiritualibus rudem, ad inuisibilium intelligentiam assurgere, et in illis contemplationis oculum figere? Nulla quippe nouit adhuc nisi corporalia, nil aliud cogitanti occurrit, nisi quae cogitare consueuit, sola uisibilia. ... Facit tamen quod potest, intuetur ea quomodo potest. Cogitat per imaginationem, quia necdum uidere ualet per intelligentiae puritatem.

(46) Richardus de Sancto Victore *In Apocalypsim Joannis libri septem* (PL 196), Paris 1855, 683-887: I, 1, 688A: Unde B. Dionysius in libro praedicto, ait: « Neque possibile est animum nostrum ad non materialem illam ascendere coelestium hierarchiarum et imitationem et contemplationem, nisi ea quae secundum ipsum est materiali manuductione utatur ». Materialem manuductionem vocat rerum corporalium imagines, per quas in sacra Scriptura ea quae incorporea et invisibilia sunt, figurantur; cf. Pseudo-Dionysius Areopagita *De coelesti hierarchia*, hg. von Günter Heil (Corpus Dionysiacum II, Patristische Texte und Studien 36), Berlin / New York 1991 (pp. 7-59), I, 1, 3, p. 8.

(47) Richardus de Sancto Victore *Liber exceptionum*, I, 2, 3, p. 115: ... in hoc valde excellentior est divina scriptura scientia seculari, quod in ea non solum voces sed et res significativae sunt.

(48) Richardus de Sancto Victore *Liber exceptionum*, I, 2, 5, p. 116: Voces non plus quam duas aut tres habent significationes. Res autem tot possunt habere significationes quot habent proprietates. Hee autem res

primae, res secundas significantes ... .

(49) Richardus de Sancto Victore *In visionem Ezechielis*, hg. Jochen Schröder, in *Gervasius von Canterbury, Richard von Saint-Victor und die Methodik der Bauerfassung im 12. Jahrhundert* (Veröffentlichung der Abteilung Architekturgeschichte des Kunsthistorischen Instituts der Universität zu Köln 71), I-II, Köln 2000, II, pp. 372-553: ibidem, Prologus, p. 372: Multis divinae Scripturae multo amplius dulcescunt, quando congruum in eis aliquem secundum litteram intellectum percipere possunt.

(50) Richardus de Sancto Victore *Nonnullae allegoriae tabernaculi foederis* (PL 196), Paris 1855, 191-202. 以下 *Nonnullae allegoriae* と表記 : ibidem, 199D: Quod est inter lignum et aurum, hoc est inter historicum et mysticum sensum.

(51) Richardus de Sancto Victore *Nonnullae allegoriae*, 199D-200A: Mystica vero intelligentia pro certo est tripertita. Tropologica tenet locum unum, allegorica medium, anagogica summum.

(52) Richardus de Sancto Victore *Benjamin maior*, IV, 14, [104]: ... allegoriter admonens quid pro nobis per [Deum] semetipsum fecerit, ...

(53) Richardus de Sancto Victore *Nonnullae allegoriae*, 200B: Quid est enim tropologia nisi moralis scientia, ...? ; Richardus de Sancto Victore *Liber exceptionum*, II, 10, 1, p. 115: Tropologia est cum per id quod factum legimus, quid nobis sit faciendum agnoscimus.

(54) Richardus de Sancto Victore *Nonnullae allegoriae*, 200C: Quid enim dicimus anagogen nisi mysticam et sursum ductivam supercoelestium intelligentiam? ... Ad anagogen spectat sperandorum praevidentia praemiorum.

(55) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 4, p. 119: Primo fundamento insident omnia, sed non omni modo coaptantur.

(56) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 4, p. 118: Sic divina pagina multa secundum litteralem sensum continet, quae et sibi repugnare videntur et nonnunquam absurditatis aut impossibilitatis aliquid afferre.

(57) Cf. Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 11, p. 119; Aurelius Augustinus *De Genesi ad litteram libri duodecim*, Sancti Aurelii Augustini opera 3/2, hg. J. Zycha (CSEL 28/1), Prag/Wien/Leipzig 1894, 1-456, I, 21, 31.

(58) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 4, p. 122: ... qui solam sequitur litteram diu sine errore non posse incedere. ... Non litteratus, sed *spiritualis omnia diiudicat* (I Cor. II).

(59) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 4, p. 118: Spiritualis autem intelligentia nullam admittit

repugnantiam, in qua diversa multa, adversa nulla esse possunt.

(60) Hugo de Sancto Victore *Didascalicon*, VI, 11, p. 128: ... [divina] sententia nullam admittit repugnantiam, semper congrua est, semper vera.

(61) リカルドゥスにおいて徳は、人間の根源的な情動が、神へと向けて秩序付けられ、それによって相互に統制される状態を意味している。Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, VII, p. 108: Siquidem, nichil aliud est uirtus quam animi affectus ordinatus et moderatus. リカルドゥスの徳論については拙論 Hideki Nakamura: »*Cognitio sui* bei Richard von St. Viktor«, in: Rainer Berndt, Matthias Lutz-Bachmann, Ralf Stammberger (hgg.), *„Scientia" und „Disciplina". Wissenstheorie und Wissenschaftspraxis im 12. und 13. Jahrhundert* (Erudiri Sapientia 3), Berlin 2002, pp. 127-156 を参照。

(62) Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, XI, p. 118: Verus animae sponsus, Deus est. Quem tunc ueraciter nobis copulamus, quando ei per uerum amorem inhaeremus. Immo uero tunc sibi nos ille connectit, quando nos quibusdam internis commerciis ad suum amorem accendit, et artius astringit.

(63) Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, XIII, p. 126: Vbi amor, ibi oculus ; libenter aspicimus, quem multum diligimus.

(64) Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, XXIII, pp. 150-152: Habet tamen huiusmodi speculatio aliquid singulare valdeque notabile. Est enim prae caeteris rudibus quidem adhuc mentibus, minusque exercitatis, et ad intelligendum facilior, et ad audiendum iocundior. Siquidem haec meditanti facilius occurrit, et audientem dulcius afficit. Est plane et promptior in meditatione, et affabilior in sermone.

(65) Richardus de Sancto Victore *Benjamin minor*, LXXI, p. 296: ... animus qui in sui cognitione diu exercitatus pleneque eruditus non est, ad Dei cognitionem non sustollitur.

(66) Richardus de Sancto Victore *Benjamin maior*, V, 7, [119]: ... spiritus ... suique penitus oblitus et in extasi sublevatus totus in superiora rapiatur.

(67) 脱我の構造については拙論「Memoria extasis —サン・ヴィクトールのリカルドゥスにおける忘我的観想と記憶—」『哲学科紀要』上智大学文学部哲学科、第三五号（二〇〇九年）一—二二頁を参照。

(68) Richardus de Sancto Victore *De IV gradibus* 43, p. 171: Hec est forma humilitatis Christi ad quam conformare se debet quisquis supernum consummate caritatis gradum attingere

volet.

(69) Richardus de Sancto Victore *De IV gradibus* 47, p. 177: Quantum ascendit per praeumptionem, tantum descendit per humiliationem.

(70) この特異な写本伝承状況が、リカルドゥスにおける霊的な道の全体像が提示されている著作『小ベニヤミン *Benjamin minor*』に関して顕著であることは重要である。Rudolf Goy: *Die handschriftliche Überlieferung der Werke Richards von St. Viktor im Mittelalter*, p. 309 を参照。